

シリウスは幸福であるか

創立百年を超えた歴史ある男子校である湊陵高等学校は、文武両道を掲げた進学校である。つまりどういうことなのかと言うと、文もやれ武もやれと事あるごとに生徒を嚇けるが、例えば武ができなくても文はやれ、文も武もが好ましいが武が文を妨げるぐらいなら文をとれ、文をやらざるは本学学生にあらざうという本音が見え隠れした勉強に重きを置いた学校である。進学校というからには偏差値もそこそこ高いため、勉強も体育もできた人間の不平等性を強く感じさせる者か、あるいは体育はできなかつたけれど勉強だけはできた安心感と好感を持てる者が占め、少なくとも勉強はできなかつたけど運動だけはまかせてくれというタイプの人間はいない。余談で

はあるが、喬林啓介は運動も比較的得意なタイプだ。少なくとも身体を動かすことが好きだからという理由で入部したバスケット部でレギュラーを死守するために頑張れるくらいには好きだ。もつとも、弱小バスケット部であるのでさして自慢にはならない。

さて話を戻そう。ここで、これがどういふ事態を引き起こすかという話であるが、体育の授業が割と気の抜けたものとなる。もちろん皆それぞれに一生懸命であるし、一部例外がいるとしても多くは基本、根が真面目なのでしつかりと汗をかきながら取り組んでいる。が、なんというか、緩い。

「俺がとるぜ！ つぶほ」

「なにやってんだよ！ 宮坂あ！」

「ちよつとまで、よく考えるんだ！ 顔面セーフじゃね？」

構えた両手からすり抜けた末、顔でバウンドさせたボールを生徒が笑いながら追いかける光景は長閑

ですらある。それをいいなあ、楽しそうだなあと思
いながら眺めているしかない啓介にとつては、たと
えそれがお互いにお笑い要員を抱えての、もはやバ
レーボールとは言えないゲーム模様となつていたと
しても、いや、だからこそ、羨ましくて仕方ない。

自分の参加しない体育ほど詰まらないものはない。
試合開始直後は嘯み締めていた欠伸をもはや堂々と
晒しながら、重要な役目だと指名されたスコアボー
ドをめぐる。誰もスコアなど気にもしていない。手
首に巻かれた白い包帯がかえすがえす忌々しい。

この包帯、一体何があつたのかといえば、聞くも
涙、語るも涙のエピソードがある。

先日、啓介が自転車での下校中のことだった。変
わつたことは何もしていない。ただ、いつものよう
に向かつてくる風に切り込んでいく爽快感を楽しん
でいた。

湊陵高等学校は、市街地から少しばかり外れた山

の中腹に存在する。実家が遠方にある学生は寮生活
であるが、自宅から通学している学生の多くが自転
車を利用する。何せ山。電車通学を選んだところで、
駅から距離があるのだから、そこからの交通手段を
考えなければならぬ。自家用車での送迎という優
雅な選択肢を持つている学生やバスを選ぶ学生も少
なくはないのだが、なんだかんだ、男の子でしよ
う高校生でしょう体力ありあまつてるでしょう、と距
離があるのが急な上り坂だろうが自転車息を切ら
せながら駆け上がる生徒が多い。

そんな最終的に登りきれず押して上がりながら悪
態をつく急勾配も、帰り道、下り坂となれば意味が
大きく変わってくる。

山とはいっても道路は広く舗装されている。車通
りは少なく、急なカーブもあまりない。ただただま
っすぐ降りていくことのできる道。風になるには最
適である。

朝礼で校長が3回に1回は思い出したように話を自分のこととして真面目に聞いている学生はどれほどいるだろうか。「本学学生の起こした自転車事故の件数は県内でも目立って多く、このままでは自転車通学の禁止も考え云々、命に関わることだとして」と認識して、皆さん一人一人が云々」具体的な数が示されないので真実群を抜いて多いのか、あるいは脅しなのかは定かでないが、多くの生徒が自分は大丈夫だろうと高を括っているながらも、事故が起こりやすいポイントを認識しているのが事実ではある。わかつていながらそこに減速せずに突っ込むから事故がなくならないわけだが。例に洩れず、啓介もまあ大丈夫だろうと樂觀視していた。とはいえ、事故多発ポイントではきちんと減速していたのだが、ほとんど車の来ることのない住宅地の交差点で、その減多に來ないはずの車がぬつと現れたことに驚いて咄嗟にブレーキをかけたのは良い判断ではなかつ

た。もっと早くにかけていれば、あるいははむしろスピードを上げて走り抜けてしまえば事故にはならなかつただろう。慌ててかけたブレーキにより自転車は交差点の真ん中で急停止し、勢い余って一回転した。住宅地ということもあり、車が徐行していたのは幸いであつた。

啓介が投げ出されたほんの数センチ手前で車は止まつた。そう、車と接触はしなかつた。ただの自損事故である。しかし車に乗つていた善良な老夫婦は、大丈夫だ当たつてない転んだけれど大事ないと言いつ張る啓介に構わず救急車と警察を呼び、無事大惨事と相成つた。

安物の自転車は籠が盛大に曲がり、いくつか傷はついたが、言うなればそれだけだつた。試しに力任せに成形してみたところ、不恰好ながら籠の形になつたので問題はない。フレームが曲がつて漕げなくなつたとなればこの期に新しい、もっと性能の良い